目次

杜子春 3
蜘蛛の糸 32
羅生門 42
点鬼簿 59
漱石山房の秋 73
漱石山房の冬 79
蜜柑 85
鼻 95

ザ・芥川龍之介 一

芥川龍之介

杜子春

一

或（ある）春の日暮です。

唐（とう）の都洛陽（らくよう）の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春といって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費（つか）い尽して、その日の暮しにも困る位、憐（あわれ）な身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえば、天下に並ぶもののない、繁昌（はんじょう）を極（きわ）めた都ですから、往来にはまだしっきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当っている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗（しゃ）の帽子や、土耳古（トルコ）の女の金の耳環（みみわ）や、白馬（しろうま）に

飾った色糸の手綱（たづな）が、絶えず流れて行く容子（ようす）は、まるで画のような美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭（もた）せて、ぼんやり空ばかり眺（なが）めていました。空には、もう細い月が、うररうらと靡（なび）いた霞（かすみ）の中に、まるで爪の痕（あと）かと思う程、かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし――こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまった方がましかも知れない」

杜子春はひとりさっきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇（すがめ）の老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じっと杜子

春の顔を見ながら、
「お前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。
「私（わたし）ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」
老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしました。
「そうか。それは可哀そうだな」
老人は暫（しばら）く何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、
「ではおれが好（い）いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中（よなか）に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金（おうごん）が埋（う）まっている筈（はず）だから」
「ほんとうですか」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙（あ）げました。ところが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりも猶（なお）白くなって、休みない往来の人通りの上には、もう気の早い蝙蝠（こうもり）が二三匹ひらひら舞っていました。

二

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯(ただ)一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそっと掘って見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。
大金持になった杜子春は、すぐに立派な家（うち）を買って、玄宗（げんそう）皇帝にも負けない位、贅沢（ぜいたく）な暮しをし始めました。蘭陵（らんりょ

う）の酒を買わせるやら、桂州（けいしゅう）の竜眼肉（りゅうがんにく）をとりよせるやら、日に四度（よたび）色の変る牡丹（ぼたん）を庭に植えさせるやら、白孔雀（しろくじゃく）を何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦（にしき）を縫わせるやら、香木（こうぼく）の車を造らせるやら、象牙（ぞうげ）の椅子を誂（あつら）えるやら、その贅沢を一々書いていては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂（うわさ）を聞いて、今までは路（みち）で行き合っても、挨拶（あいさつ）さえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやって来ました。それも一日毎（ごと）に数が増して、半年ばかり経（た）つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛（さかん）なことは、中々（なかなか）口には尽されません。極（ごく）かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯（さかずき）に

西洋から来た葡萄酒（ぶどうしゅ）を汲（く）んで、天竺（てんじく）生れの魔法使が刀を呑（の）んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠（ひすい）の蓮（はす）の花を、十人は瑪瑙（めのう）の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節（ふし）面白く奏しているという景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、昨日（きのう）までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなってしまいました。いや、宿を貸すどころか、今では椀（わん）に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ぼんやり空

を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目眇（すがめ）の老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好（い）いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」

老人はこう言ったと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻（か）き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、忽（たちま）ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使――すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいにあった、あの夥（おびただ）しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなってしまいました。

三

「お前は何を考えているのだ」

片目眇（すがめ）の老人は、三度杜子春（どとししゅん）の前へ来て、同じことを問いかけました。勿論（もちろん）彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇（たたず）んでい

たのです。
「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っているのです」
「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好いことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの――」
老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮（さえぎ）りました。
「いや、お金はもういらないのです」
「金はもういらない？　ははあ、では贅沢をするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」
老人は審（いぶか）しそうな眼つきをしながら、じっと杜子春の顔を見つめました。
「何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想（あいそ）がつき

たのです」
杜子春は不平そうな顔をしながら、突慳貪（つっけんどん）にこう言いました。
「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」
「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従（ついしょう）もしますけれど、一旦貧乏になって御覧なさい。柔（やさ）しい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になったところが、何にもならないような気がするのです」
老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。
「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか」
杜子春はちょいとためらいました。が、すぐに思い切った眼を挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、
「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子（でし）になって、

仙術（せんじゅつ）の修業をしたいと思うのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道徳の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜（ひとよ）の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えて下さい」

老人は眉（まゆ）をひそめたまま、暫くは黙って、何事か考えているようでしたが、やがて又にっこり笑いながら、

「いかにもおれは峨眉山（がびさん）に棲（す）んでいる、鉄冠子（てっかんし）という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と、快く願（ねがい）を容（い）れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時宜（おじぎ）をしました。

「いや、そう御礼などは言って貰うまい。いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな。――が、ともかくもまずおれと一しょに、峨眉山の奥へ来て見るが好（い）い。おお、幸（さいわい）、ここに竹杖（たけづえ）が一本落ちている。では早速これへ乗って、一飛びに空を渡るとしよう」

鉄冠子はそこにあった青竹を一本拾い上げると、口の中（うち）に咒文（じゅもん）を唱えながら、杜子春と一しょにその竹へ、馬にでも乗るように跨（また）がりました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち竜のように、勢（いきおい）よく大空へ舞い上って、晴れ渡った春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆（きも）をつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明（ゆうあか）りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、（とうに霞に紛れたのでしょう）どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢（びん）の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱（うた）い出しま

した。
朝（あした）に北海に遊び、暮（くれ）には蒼梧（そうご）。
袖裏（しゅうり）の青蛇（せいだ）、胆気粗（たんきそ）なり。
三たび岳陽に入れども、人識（し）らず。
朗吟して、飛過（ひか）す洞庭湖（どうていこ）。

四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞い下（さが）りました。
そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空（なかぞら）に垂れた北斗の星が、茶碗（ちゃわん）程の大きさに光っていました。元より人跡（じんせき）の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やっと耳にはいるものは、後（うしろ）の絶壁に生（は）えている、

曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。
二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、
「おれはこれから天上へ行って、西王母（せいおうぼ）に御眼にかかって来るから、お前はその間ここに坐って、おれの帰るのを待っているが好（い）い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性（ましょう）が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言（ひとこと）でも口を利（き）いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと覚悟をしろ。好（い）いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と言いました。
「大丈夫です。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています」
「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」
老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨って、夜目にも削ったような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静（しずか）に星を眺めていました。するとかれこれ半時（はんとき）ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透（とお）り出した頃、突然空中に声があって、

「そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の教（おしえ）通り、何とも返事をしずにいました。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇（おど）しつけるのです。

杜子春は勿論黙っていました。

と、どこから登って来たか、爛々（らんらん）と眼を光らせた虎（とら）が一匹、忽然（こつぜん）と岩の上に躍（のぼ）り上って、杜子春の姿を睨（にら）みながら、一声高く哮（たけ）りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈（はげ）しくざわざわ揺れたと思うと、後（うしろ）の絶壁の頂から

は、四斗樽（しとだる）程の白蛇（はくだ）が一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛（まゆげ）も動かさずに坐っていました。

虎と蛇とは、一つ餌食（えじき）を狙（ねら）って、互に隙（すき）でも窺（うかが）うのか、暫くは睨合いの体（てい）でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙（きば）に噛（か）まれるか、蛇の舌に呑（の）まれるか、杜子春の命は瞬（またた）く内に、なくなってしまうと思った時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失（う）せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起るかと、心待ちに待っていました。

すると一陣の風が吹き起って、墨のような黒雲が一面にあたりをとざすや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄（すさま）じく雷（らい）が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しょに瀑（たき）のよう

な雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中（なか）に、恐れ気（げ）もなく坐っていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、――暫くはさすがの峨眉山も、覆（くつがえ）るかと思う位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟（とどろ）いたと思うと、空に渦（うず）巻いた黒雲の中から、まっ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡って、向うに聳（そび）えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯（いたずら）に違いありません。杜子春は漸（ようや）く安心して、額の冷汗（ひやあせ）を拭（ぬぐ）いながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧（よろい）を着下（きくだ）した、身の丈（たけ）三丈もあろうという、厳（おごそ）かな神将が現れました。神将は手に三叉（みつまた）の戟（ほこ）を持っていましたが、いきなりその戟の切先（きっさき）を杜子春の胸（むな）もとへ向けながら、眼を嗔（いか）らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢（かいびゃく）の昔から、おれが住居（すまい）をしている所だぞ。それも憚（はばか）らずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然（もくねん）と口を噤（つぐ）んでいました。

「返事をしないか。――しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属（けんぞく）たちが、その方をずたずたに斬（き）ってしまうぞ」